

みなと・新橋

今・むかし新聞

第4号
平成28年3月

今振り返る『私の昭和』

平成に入り、すでに二十年以上過ぎました。今回、港区立生涯学習センターに集まる『語り部』のメンバーに、『私の昭和』を振り返っていただきました。

「初午は、子供の楽（う）ち田」

清田 和美

神田の名主・斎藤月岑（げっしん）著の『東都歳事記』で初午について、このように記されています。「江戸中稲荷祭、前日より賑へり、江府はすべて稲荷勧請の社夥しく、武家は屋敷毎に鎮守の社あり。」と初午の賑わいを述べています。さらに「寺社の境内に安ずる所は、神樂を奉し、幣帛をささげ、市中にも挑灯行燈をともし、五彩の幟等を建つらね（以下略）」と、初午の賑やかさを伝えています。

武家屋敷・商人の初午

お正月である一月は、何かと気ぜわしい月です。新年の挨拶からはじまり、初詣・初荷・七草・鏡開き・初閻魔・初天神・初地藏等、様々な行事に追いかけられます。

やっと落ち着くことのできるのが二月。その始めの「午」の日が初午です。武家屋敷・商人の敷地には、御稲荷様が祀っています。普段は、敷地に入る事が出来ませんが、「初午」の日に限って近隣の子供たちに開放します。子供たちは、太鼓を叩いたり、踊ったりして遊びました。武家や商人たちは、御祝いとして「お赤飯・菜飯・焼豆腐・芋・こんにゃく」などを用意して振る舞います。子供たちは、喜んで馳走を頂いたのです。

日比谷稲荷・烏森稲荷の賑わい

『絵本江戸風俗往来』（菊池貴一郎著）、『東京年中行事』（若月紫蘭著）、『東都歳事記』（斎藤月岑著）等に、初午の様子が述べられています。この日の祭礼は、神輿や手踊りの行列等、大人の祭礼です。寒い中を賑やかさで楽しんでいたようです。「初午や煮しめてうまき 焼き豆腐」（久保田万太郎）春の季語である「初午」を詠った作品です。

私も昭和三十年の頃、葛飾の金町で幼年時代を過ごしました。この日も「初午」の時は近所の稲荷に行きますと、御菓子を沢山貰ったり、お赤飯や煮しめを食べたりした記憶があります。このような民間風習は、これからも続いてほしいと思います。



「芝愛宕下の羽子板市」

井上 繁

年末の風物詩としてまず思い浮かぶのが「歳の市」です。注連しめ縄や輪飾り、そして福寿草の鉢植えなどお正月用の商品や道賣を売る店が立ち並び、当然羽子板を売る店も出るので通称「羽子板市」、子供の私たちは誰もがこっぴ呼んでいました。

東京で「歳の市」といえば浅草の観音様、深川八幡、神田明神などが有名ですが、戦前は芝・愛宕さんの「歳の市」も結構広く知られていて、十二月二十三、四の両日には大勢の人で賑わいました。

当日になると山の石段下の広場には構えの大きい羽子板屋が何軒も、直前の大通りは車を通行止め

にし、車道の両側それに中央の部分は背中合わせに露店が立ち並びました。その中には子供たち相手の店も多く、普通の日は駄菓子屋か紙芝居屋で使う一銭程度しか買えないお小遣いも、その日は三十銭とか多く貰って、それを掌中にしっかり握りしめて露店を見て回りました。

男の子に人気があったのは、吹き矢、紙鉄砲、針金細工、付けた樟脳が解ける勢いで水上を走るセルロイド製の船、飛行機の組み立てセット、児童向け雑誌のバックナンバーやその付録の類といった程度で、今と違ってたいした物は無いのですが品定めには結構迷いました。何度も何度も見て回ったあげく買った品物を手に家に帰るときの嬉しさは格別でした。

この愛宕下の市は戦後数回開かれましたが、客足のあまりの少なさにいつしか行われなくなってしまういました。

「昭和初期の頃」

宮川 武夫

私が小学生から中学生の頃、東京タワーのあたりから滝が流れていて、その流れが弁天池という大きな池に流れていました。この池のあたりや芝公園でもよく遊びました。昭和三十九年のオリンピックのときに建てたプリンスホテルは、以前は増上寺の敷地で多くの御廟があり、各大名の名前の入った燈籠が数多くずらりと並んでいました。

増上寺では、蟬やカナブンを採って遊んでいました。山から東の海側を見ると東京湾が一望でき、西の山側を見ると富士山が見えました。月島には海水浴場があり泳ぎに行った事がありました。又現在の浜松町駅の海側に芝離宮恩賜公園があります。その先は砂浜で原っぱでした。そこでは子供達がかくれんぼやとんぼとりをして遊んでいました。とてもとなつかしい風景です。

「靖国神社と僕」

武 恒雄

昔のことでキチンと覚えているわけではないですが、当事国民学校三年生の僕は、上級に引率されて靖国神社での清掃奉仕に行ったことがありました。五・六人の学童たちは竹ボウキやチリ取りを持ち二キロくらいは朝の道を行進して歩き、大鳥居から大村益次郎の銅像を見上げながら参道に入り片隅で落ち葉拾いなどをしたんだと思います。現在では、東京地方の桜開花宣言日を決める標準木の方が有名ですが、その頃は春・秋の例大祭ではスラックとならぶ屋台店の賑わいを見て歩くのが楽しかったし、勲章をたくさんぶら下げた将軍たちが目の前を通るのを興味丸出しで眺めたりして、一日中過しても飽きない遊び場でもありました。国のために一命を捧げた方々を祀るところなので、誰もが素直に頭を垂れる事ができたらしいのですが、難しい問題の整理がつかぬのか、スッキリしないのが残念です。それでも、僕にとっては思い出一杯の懐かしいところ、少々遠回りでも寄り道をしてくるようにしています。

「学徒出陣」・学生から兵士へ・

神代 忠男

「学徒出陣」という言葉をご存知ですか。最近テレビでもよく見ますが、明治神宮競技場で学徒が行進しているのが雨の壮行会です。私は現在九十三才、太平洋戦争の始まった昭和十六年は大学二年生でした。その後あと一年で卒業という時、昭和十八年九月に突然時の東條首相が「戦争が激しくなったから二十才になった者は学業途中でも戦争に行け」と「学徒出陣」を宣告したのです。

学生生活がまだ一年あると思っていた我々はかなりあわてました。しかも十二月入隊という事で東京生まれの私などまだ、地方から来ていた学友は、その間に身体検査のため故郷に帰らねばならないし、卒業論文も書かなければならないし、その間に壮行会などもあり大騒ぎになりました。しかしその忙しさがかえって戦争に死に行くという大事を忘れさせたのかも知れません。不思議なことに我々は余り悲壮感を感じなかった様に思います。それでも我々同期の学生千人の内二百人も戦死しました。私の親友もビルマのインパール作

戦（日本軍が全滅した戦）で戦死しました。

戦後七十年たった今、運良く戦死しなかった私は今更の様に若くして戦死した彼等の夢を見ます。彼等をもつにつけて、この年齢まで生きている事が申し訳なくも思います。戦争はいけません！人が人を殺せば殺人犯です。でも戦争で全然個人的には何の恨みもない敵兵を殺すと「英雄」と言われます。おかしいと思いませんか。人間の知性の欠如としか言えませんね。戦争はいけません！

「都会に憧れ社会人へスタート（昭和三十 年代）」

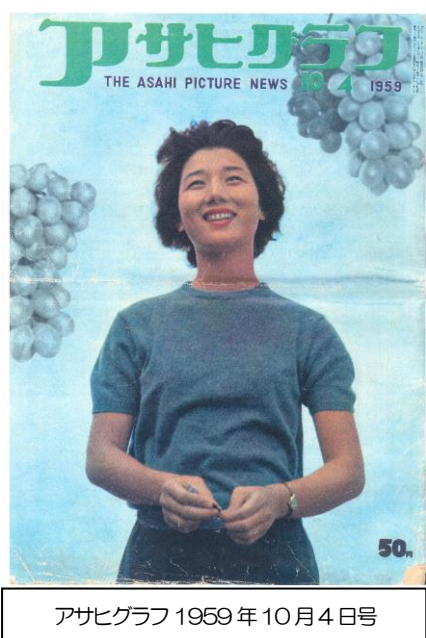
宇和島 常子

私は昭和三十一年に日本橋の百貨店に入社しました。二ヶ月にわたる第五次までの入社試験と面接があり、やっと五月に入社しました。日航のスケジュール募集にも関心があり、二ヶ所同時に応募しましたが、私の心配は的中し二次試験が合ってしまった。滋賀の田舎で育った私にスケジュール合格は夢の又夢だろうと思ひ百貨店一本にしましたが、当時は新幹線も無く夜行で九時間かけて二〜三回往復しました。めでたく合格したものの試験管より「言葉の訛りは半年間で直せるか」と言われ、「はい直します」と言い切りました。案の定、配属先は顧客係で玄関案内所やエレベーター・エスカレーター係となり、一日言葉の訓練でした。少し標準語に近づき年末のクリスマスシーズンにはサンタガールに選ばれてうれしく思いました。ところが明日から本番という前日から高熱を出し肺炎となり一ヶ月程入院、その当時の特效薬ペニシリン注射で助かり退院後一ヶ月程実家での療養生活、やっと春には再スタート出来ました。

美しい野山に囲まれ清く澄んだ空気と水の中で育った私が、突然都会のご真ん中に出て慣れない言葉、人間関係、排ガス、スモッグ等都会の空気に疲労困憊、六十五キロあった体重も五十キロになってしまいました。その後エレベーター担当時に昭和天皇を催事階へ…この時の緊張感たるや大変なものでした。またインドネシアのスカルノ

大統領が来店され、エレベーターのハンドルを持つ私に「スペシャルガール？」と声をかけられ固まっしてしまいました。その折いつも側に美しい女性が一人いました。その人がデビさんだったのです。

その後秘書部に転属となり、勤続十年の間売場担当は一度も経験出来ませんでした。ある日上司の指示で屋上に行くと、待っていたカメラマンから「自由にポーズしてみて」と言われパチパチ撮られてびっくりするばかり…翌月アサヒグラフの表紙になっていました。それならもう少しオシャレしたかったと思いました。田舎の友人からの手紙や声かけがうれしかったなつかしい思い出です。



アサヒグラフ 1959年10月4日号

平成二十七年 度出前授業

平成二十七年度は港区学校支援地域本部事業の学校支援ボランティアとして、「出前授業」を行いました。

「白金小学校 出前授業」

中嶋 弘

一月二十二日（金）白金小学校にて社会科の出前授業を行いました。今日の課題は災害時に電気、ガス等が止まったときの為の七輪の使い方について、三年生の各組が、五・六人グループで七輪に分かれ、各班に一台ずつ七輪を配布し、語り部の一人が木炭の火をおこすところから実演しました。

古新聞紙を丸めてマッチで点火し、七輪の中に入れてその上に木材の小片を乗せます。そして、下の通風口を扇で扇ぎ炭に火がつき燃えはじめます。その後、各班が手順どおりにやってみましたが、まず

マッチの擦り方がわからない子が多いのに驚きました。今はマッチを使うのはバーベキューの時ぐらいだし、着火剤やらガスマッチ等の便利器具があるので使う機会がないのでしょうか。

火がついたら金網を乗せて餅を焼きましたが、なかなか焼けないと思っていると、いつの間にか黒焦げになってしまい、焦げたところを落として、醤油をつけて海苔を巻いて食べました。これから給食だというのに二個食べる子もいて、ワイワイガヤガヤ寒風が吹くなか子供達は元氣一杯でした。これから日本を背負って立つ皆が、大変頼もしく感じました。

三年生の三組がローテーションを組んで、昔の洗濯と七輪を全員が体験しました。強風のため火の粉が飛びの心配しましたが、無事終了しほっとしました。



「白金小学校 出前授業」

中嶋 房子

白金小学校三年生より、課外授業の一環として、たらい、洗濯板を使つての授業の依頼がありました。

一月二十二日、雪、雨の天候にならず、ホッとして校門をくぐりました。一限、二限、三限と三十数名の生徒さんとの実習です。久し振りに、割烹着を着て三年生の教室で、四名ずつ八班に分かれ、生徒さんは静かに興味深い様子でした。準備は万端、まず洗濯物の仕分け、洗ひ方の説明をし、昔は沢山の洗濯物だったので、肌着、パンツ、大きい物等と区別し、小物はもみ洗い、シャツ、毛布等は踏み洗いと区別して洗いました。戦中戦後、石鹸がなく、灰と水をたらいに入れその上澄みで洗濯した事も話しました。もみ洗い、つまみ洗い、洗濯版を使って左手で押さえて、右手でこするなども実演し、その後一緒に作業に入りました。洗濯板の上のくぼみに固形石鹸を置いて洗濯した事等も説明しましたが、みんな、冷たい！冷たい！と大騒ぎで、色の薄い物より、汚れたところをみて、もみ、こする、腰を曲げ

て、力を入れて、小さな手で一生懸命です。

すぎの桶で、振りすぎ、しぼり方の練習、広げてたんで、パタパタ、ポンポンと楽しそうでした。「お家でもう一度、すすいで仕上げをして風通しの良い所に干してね。」「今日から、自分のパンツは自分で洗うこと、習慣づけましようね。」

「昔は赤ちゃんの紙おむつはなく、古いゆかた等でおしめを縫いました。昔のお母さんは洗濯機もなく一日中仕事がありました。が便利時代になりましたね。でも電気が止まったらー今日の実習を思い出してね。」と話をして授業を終わりました。



はるーんの『語り部』ってなあに？

平成十三年「生涯学習ボランティア講座」事業として、生涯学習センター内校田小学校記念室に、新橋界隈を中心とした区民の方々が集まり、「昔の港区」の学習会を行っています。

平成十五年度からは、これまでの学習成果の発表の場、また小学校の学習支援活動として、語り部のメンバーが小学校に出向き、子どもたちにいろいろな昔の話をしています。

地域の歴史や暮らしまた戦争の貴重な体験など、過去を風化させずに未来へ語り継ぐことが大切であると考えているからです。

この「みなと・新橋 今・むかし新聞」もその一環として発行しています。ぜひ、興味のある方は、はるーんまでご連絡ください。

発行・問合せ

住所 〒105-0004 東京都港区新橋三十八-三

電話 〇三三四-三二一六〇六

公益財団法人港区スポーツふれあい文化健康財団
港区生涯学習センター（はるーん）

協力・編集 新橋青年しんこう会